

今号の  
表紙作家

## ガラスが内包する エネルギーに魅せられて



### 木下良輔 (高32回)

●きのした・りょうすけ

大鹿村出身。東京ガラス工芸研究所一期研究科修了。【指導】徳島ガラススタジオ／ピルチャックガラススクール／南ソウル大学  
【展覧会】洞爺村国際彫刻ビエンナーレ／A・G・C 教室展企画／個展5回 【仕事】箱根ガラスの森美術館／隈研吾建築都市設計事務所／サントリイ美術館／花巻市／チエジユ島ガラスキャッツ  
ル 【現在】東京ガラス工芸研究所非常勤講師  
／大阪芸術大学  
非常勤講師  
／アートガラスクラブ主宰



「本」は作品テーマのひとつ

「木下君ね、これからゴミを作ってしまうの？」

誰でも忘れられない言葉に遭遇する時があります。私にとってはこれがそうでした。ガラス作家として駆け出しの頃、たまたまバイト先で食らったその一言が、私を本格的にガラスと向き合わせることとなりました。今でも、私を振り出しに戻してくれる大切な言葉です。

神奈川県西部の松田町にある私の工房は、通りからは富士山が望める静かな環境にあります。手狭なスペースの中で、年季の入った電気炉や加工機材類と共生しています。

ガラスは歴史的に人工物の中では最古の無機素材といわれ、私たちが日頃目にするガラスは、液体が固体化したものです。個人作家が作るものから企業が生産する工業製品、食卓から建築と、種類も利用法も多岐にわたるガラス作品のなかで、吹きガラスに代表される技法に比べ、私の用いる鑄造技法（型を作り、そこにガラスを流し込んで製作する方法）はあまり知られていないのが実状です。創作のみに没頭する毎日

とはいきませんが、「内包するエネルギー」を一貫したテーマに制作活動をしています。普段から、ガラスという素材の持つ不可思議な成形プロセスの曖昧さが、実に人間的で感じています。炉に入れる前は柔軟で脆弱だったのに、出てくる時は見事に反抗した態度で、無言であるわけです。いわゆる失敗というやつですが……。この私が扱うから問題が起きるのかわかりませんが、何事も経験。どんな道も犀の角の如く独り歩め、これからは……。です。

私の故郷である大鹿村文満地区に、2基の墓石が建っています。ガラスを志した私にエールを送り続けてくださった、映像作家・松川八洲雄さん・義子さんご夫妻のガラスの墓です。東京生まれの松川さんは、お父さんが大鹿出身で、私の父の従兄弟に当たり、疎開で二時期飯田高校に在籍（高2回）されておりました。墓石はご家族の依頼で私と父が制作にあたりました。生前から愛した大鹿の地で、今日も二人寄り添って赤石山脈を眺めていらつしやることでしょう。ガラスとのつきあいも38年目。ガラス産業の盛んなチエコスロバキア（当時）では、50代、60代の作家はまだまだハナタレと聞きます。然りとて、50歳半ばになった私が、ガラスというおもしろい素材をどう世の中に還元すべきか悩みは尽きません。